

東南アジア史学会 会報 No.19

第13回大会予告

委員会での協議の結果、今秋の第13回大会を下記のように開催することになりましたのでお知らせいたします。なお、最終的には、10月下旬ごろに研究発表レジュメなどとともに御案内いたす予定でございます。個人研究発表を希望される場合には、9月15までに発表要旨を委員会宛にお送り下さい。なお、その場合には、コメントをされる方をあわせてお申し込み下さいますよう、お願ひいたします。

(1) 日 時 昭和48年11月17日(土)・18日(日)の両日

(2) 場 所 未定

(3) 共通テーマ

(a) 東南アジアの先史学(仮題)

(b) 東南アジアの文学 一民族主義と文学一

(4) 日 程 第1日(11月17日)

午前 東南アジアの先史学(報告者は交渉中)

午後 東南アジアの文学(報告者は交渉中)

個人研究発表(未定)

第2日(11月18日)

午前 個人研究発表(未定)

午後 西北タイ山地民族:生活編(8ミリ・フィルム)白鳥芳郎氏

総会

懇親会

□会長選挙に関するお知らせ

今秋で河部利夫会長の任期が満了するため、新しい会長を選出する作業にとりかかることになりました。会長選挙は「東南アジア史学会役員選出規則」に則って行われますが、過去数回の選

挙の手続すでに御承知の通り、まず会員の皆様に「会長候補者選考委員」7名を直接選挙していただき（第3条3），会長は同委員会の選考を経て、会員総会において決定される（第1条1）ことになります。

そこで、上記の選考委員の選挙を管理する「選挙管理委員会」（会長指名の5名の委員により構成される。未定）が9月はじめから活動を開始し、その後の選挙日程を作製する予定でございます。

ところで、会員の皆様に、とくに、御留意お願い致したいことは、「選挙権及び被選挙権を有する者は会費を完納した会員とする」という第3条4の規程でございます。会費未納の方はぜひ早急に会費をお納め下さいますよう、お願ひいたします。

昭和48年7月31日

研究会「第二次世界大戦と東南アジア」に出席して

永 積 昭

第二次世界大戦中におけるインドネシアと日本との関係については、1959年に西嶋重忠を中心とする研究グループによって完成された『インドネシアにおける日本軍政の研究』があることはよく知られている。この研究は戦争中の実情に詳しい西嶋氏自身や故岸幸一氏が直接執筆陣に参加されたためばかりではなく、多数の当事者たちとのインタビュー、現存する旧日本軍の重要史料などに基づいていたために国際的にも高い評価を受け、外国人の研究にもさかんに利用されている。しかしこの研究が刊行されて以来すでに十数年を経ているのに、日本人の研究でこれに続くものは必ずしも多く現われていなかった。

東南アジア史学会では昨72年11月の大会で共通論題として「第二次世界大戦と東南アジア」を選び、この分野の研究のための基礎的史料の発掘を学会の仕事のひとつとするようになったが、折しも昨年から今年にかけて重要な文献がふたつ出版された。そのひとつは宮元静雄氏の『ジャワ終戦処理記』である。著者宮元氏は終戦の時ジャワ派遣第16軍の作戦参謀を勤められ、無条件降服後、連合軍の進駐時にこれと接衝され、1947年春の，在ジャワ日本軍の復員まで、いわゆる終戦処理に当られた。今までの日本側の史料や研究の在り方が、とかくインドネシア攻略作戦か占領行政かに集中しがちだったのに比して、本書はむしろインドネシア共和国の独立宣言以後、実質的独立に至るまでの過程の重要な部分を、克明なメモに基づいて記されたもので、脱稿までに実に20年余りを要したことを考えても、その周到さが想像される。

私事にわたって恐縮だが、本書の刊行直後に私がある雑誌に書いたインドネシア史についての雑文が著者のお目にとまり、とくに占領行政の部分について種々のまちがいを指摘して下さったのが機縁となり、手紙の往復を通じて著者の知遇を得ることができた。

注目に値するもう一冊の本はアハマッド・スバルジョ・ジョヨハディスルヨ氏の回想録『インドネシアの独立と革命』である。毎日新聞社の奥源造氏の編訳により、龍溪書舎から出版された本書は、独立宣言の実現に重要な役割を果し、またインドネシア共和国成立後最初の外務大臣となったスバルジョ氏がジャカルタ・タイムズに発表した英文の回想録の邦訳である。しかも奥氏の解説および巻末の海軍武官府の前田精中将と西嶋重忠氏の連合軍調査官に対する口供書が添え

られていることで、非常に大きな史料的価値をも持っている。73年3月、私がインドネシアに短期間出張する機会を得た際、この訳書を原著者スバルジョ氏をはじめ、モハマッド・ハッタ氏とアダム・マリク氏に手渡ししたことがきっかけとなり、私は西嶋氏および奥氏とはしばしばお目にかかることができ、日本占領時代のみならず、その後のインドネシア情勢、とくに65年の9月30日政変等についていろいろ御示教にあづか

その何回目かの座談の時に、『終戦処理記』の著者宮元氏が、スバルジョ著書について誠に綿密な読後感を寄せられているとのことを聞き、また私自身も宮元氏との文通の間にその読後感を入手することができた。その内容は甚だ多岐にわたり、また数字の裏づけを含む克明な考証の結果なので、ここに全部を紹介することは困難であるが、強いて要約すれば次の三点となるだろう。すなわち、①日本陸軍の第16軍は連合軍に無条件降服し、現状維持という義務を履行する必要上、心ならずも終戦まで促進して来たインドネシア独立のための準備を御破算にせざるを得なかった。②しかし、第16軍はその与えられた条件内で日本とインドネシアとの将来に禍根を残さないよう細心の注意を払い、とくに武器についてはインドネシア人の手に渡ることを黙認するかまたは誰にも使用できぬ様な形にすることでオランダ植民地支配の復帰を食い止めようとした。③以上二点は第16軍の終戦処理事務において最も苦心した点である。これに反して海軍武官府がスカルノ、ハッタ両氏の誘拐事件解決に乗出し、さらに独立宣言実現に斡旋の労をとったことは、陸軍の方針を甚しく混乱させ、迷惑至極であった。

宮元氏のスバルジョ著書読後感を見た時から、私は両の関係者たちをお招きして研究会を開きたいという願いを抑えることができなくなった。——もちろんスバルジョ氏をジャカルタから呼び寄せる事は不可能だろうが、宮元氏と奥氏とにお話を願いするわけには行かないものだろうか。——宮元氏は私の勝手な申し出を快諾され、また奥氏は辞退された代りに当時のインドネシア事情に精通しておられる西嶋氏に講演を依頼するよう提案された。もちろん私はこの提案にしたがい、やがて西嶋氏の御同意を得た時の喜びは何物にもかえがたかった。

東南アジア史学会の委員の間ではすでに5月22日の会合の際に研究会開催についての同意を得てあったので、甚だ唐突ながら6月30日に研究会を開催するように手筈をととのえたのである。わずか1カ月余りしか予告期間を置かなかった私の強引きわまるお願いを、講師のお二人がお叱りもなく承諾して下さったのも、今思えばただただ冷汗ものである。また出席者は大体20名位という私の予想をはるかに上廻り、関西方面からはるばる出席された会員をも含む、30名近い方々の参加を得た。主催者の一人として講師と出席者各位の御協力に心から感謝する次第で

ある。

当日の会場は神田学士会館で、研究会は午前 10 時に河部会長の開会の辞で始められ、午前中の大部分は宮元氏の講演に費された。宮元氏はさきに述べたスバルジョ著書の読後感をさらに増補したものを出席者に配布され、大体これに基づいて講演された。また出席者の多くは宮元氏著書を携行され、もしくは会場で購入されたので、質疑応答もかなり細部にわたるものとなつたことは喜ばしい。増補読後感の骨子は以前のものとさほど相違がないが、私の見る所では次の諸点が新たに附加されているように思われた。

1. インドネシア義勇軍六千と青年たちがクーデターを起すと考えたスバルジョ氏らの推測を、動員できる自動車などから考えて非常な日数を要したこと、また大団の日本人指導官が未然に防いだであろうこと等を挙げて一層具体的に否定する。
2. 日本敗戦の事実の発表を遅らせたのは在チモール第 48 師団や武器を持たぬ軍属、邦人の安全を考えたためであることを附記。
3. 独立問題、民族旗、民族歌についてジャワ軍政当事者は実質的には寛容な方針に傾きつつ、東京の大本營の戦争遂行第一主義に出来る限り異議を唱えたことを追加。
4. 陸軍が進めた 3A 運動、祖国防衛義勇軍、ジャワ奉公会をスバルジョ氏はけなしているが、この運動は民族意識の発展に貢献したことを強調。
5. インドネシアの独立を実現するための条件をどのように作り出すかの分析が前稿よりはるかに詳しくなっている。
6. インドネシア人側の日本軍に好意を持つ者と敵意を抱く者についての説明が加えられている。
7. 独立宣言が行なわれなかつた場合の独立への道程が詳しく書かれている。
8. 独立宣言によるジャワ混乱の増大が 12 項にわたって列挙されている。

大体以上の 8 点に要約できるかと思われる。同氏の講演のあとで、質問はいろいろ出されたが、義勇軍解散の時期および当時のインドネシアの民族主義的気運の盛り上りについての当局の情勢判断に触れたものが最も多かったように感じられた。

午前の部で早くも予定を 30 分超過するほどの密度の濃い討議だったが、午後の西嶋氏の講演で一層このような緊張感が高められた。宮元氏と対照的に、西嶋氏は比較的簡単なメモを頼りに淡淡と独立宣言に至る事情を語られた。その状況説明そのものには従来発表されている諸氏の回想録等に比してとくに新しい事実はなかったように思われるが、スカルノ、ハッタ両氏失跡の際の陸軍側反応については到底事情を話して腹蔵なく相談することの可能な雰囲気ではなかつた

として、宮元氏と異なる見解を示された。また義勇軍解散については日本政府公命には9月5日とあったが、8月17日に実施されたのは連合軍への遠慮によるものかとの発言があった。

研究会最後の総括討論はほとんど宮元氏と西嶋氏のうちとけた対談を聞くおもむきがあり、これを聞くことができただけでも出席してよかったですと感じたのは私だけではあるまい。西嶋氏によれば、日本軍は三つの面でインドネシアに対して裏切りをしたことになる。即ち第一は聖戦を唱えつつ軍事占領を行なったこと、第二はビルマ、フィリピンに独立を与えたのにインドネシアには最終段階まで与えるのを済ったこと、第三は昨日まで同生共死を唱えたのに敗戦とともに連合軍の方を向いたことがこれである。宮元氏はこれに対して読後感の中でも、「非情なようだがそれが敗戦というものである」という反論をあらかじめ用意して居られる。それは軍隊生活に経験のない我々にも十分想像できることであるが、西嶋氏がさらに言われた「『日本軍の世話をになりました』と相手に言わせては駄目だ」という一句は誠に強い衝撃を聞く者に与えた。当時としては「天皇さんに迷惑がかからぬよう、日本人が死なぬようということで頭が一杯だった」のが、結果としてインドネシアの独立に無意識のうちに貢献したとしても、それが始めから意図されたことのように語られるのは残念だ、という意味のことが語られた時、出席者一同の間に吐息のよくなものが流れるのを感じた。

当初の予定ではかなり早く終ってしまう懸念もあったのだが、それどころか会場使用の最終期限である午後4時半を過ぎてさえ討論は終る気配もなく、つくづく時間の短いのが惜しまれた。今後も機会あるごとにこのような研究会を開催することが河部会長から提案され、全日程を無事終了した。当日の全討論を録音することができたので、いずれ何らかの形でこれを活字にしたいと考えている。

研究会を終ってからの全く個人的な感想だが、完全に個人的な感情を排除して学問的な議論に終始するつもりだったのに、いまだにこのテーマに立ち向う時平静にはなり切れない自分に気がついて、いろいろな意味で驚いている。もちろん私は道義的責任を論じるつもりはなく、第一その資格もない。おそらく平時であれ戦時であれ、巨大な機構の微小部分として国と国との交渉に参加するという基本的な形式には大して相違があるとも思われず、その場合に宮元氏のように実務上のみごとな手腕を示すことや、西嶋氏のように深い洞察を示すことのいずれも私には全く不可能である。研究会の冒頭に私は、避けるべき三つの袋小路として、①軍事的技術論 ②仮定の議論 ③戦争理念の議論を挙げたが、これは全く私の自戒の言にすぎない。にもかかわらず私自身も必ずこのいずれかに陥るからこそ、平静でいることができないのだろうと思う。その上、この

場合あくまで平静で居られることに果して価値があるのかどうか、私にはわからないと告白するほかはない。「第二次世界大戦と東南アジア」は今後も私にとって困難なテーマであり続けるよう気がする。

発行日 昭和48年7月31日

発行者 東南アジア史学会

住 所 〒114 東京都北区西ケ原4-51-21

東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所

電 話 (03)917-6111

振 替 東京59721

東南アジアー歴史と文化ー

No. 3, 1973年10月発行予定

〔論 文〕

- 伊 東 照 司 クメール古典期の女神浮彫像の展開
白 石 隆 ジャワ華僑の運動、Ⅱ
岡 田 宏 二 宋代溪峒蛮の種族系譜について

〔研究ノート〕

- 田 淵 保 雄 1602年のオランダ東インド会社の特許状
吉 川 利 治 タイ国のラーマヤナ
桜 井 由躬雄 洪徳均田例にかんする史料紹介
白 石 昌 也 南ヴェトナムにおける現代史研究の現状

〔書評・紹介〕

- 鈴 木 恒 之 Anthony Reid, The Contest for North Sumatra.
1969
市 川 健二郎 C.P. FitzGerald, The Southern Expansion of the
Chinese people. Australian National University
Press. 1972
同 上 Stephen FitzGerald, China and the Overseas
Chinese Cambridge University Press. 1972
内 田 晶 子 Antonio de Morga, Sucesos de las Islas Filipinas.
Translated and edited by J. S. Cummins

〔モンスター・学会消息〕

- 永 積 昭 オランダのインドネシア研究近況
荻 原 弘 明 ビルマ調査(第1次)を終えて
河 部 利 夫 タイ農村社会・文化変動過程の調査
山 本 達 郎 オリエンタリスト会議(パリ)報告
高 橋 保 フランス植民地関係文書の調査
土 屋 健 治 日本・インドネシア研究セミナー